

2月(2018) p4c Japan ミーティング報告

- 日 2018.2.17 (土)
- 時間 17:30-19:30
- 会場 大阪大学中之島センター501
- 参加者 大学院生1名 大学教員2名 小学校教員(国立・公立)4名 中高一貫(私学)教員2名
中等教育校(国立)教員2名 パン屋さん1名 (p4c活動主宰 Skypeで参加)
- 記録 辻村(※:記録者)

キーワード

国際理解教育 自己/他者 問い 待つ 校長先生 p4c ポスター セーフティー
カリキュラム・マネジメント

1. 院生による授業報告: p4c手法を活用したアウトリーチ授業

- ・テーマ名 「ちがいとおなじ 世界ふしぎ発見！」
- ・対象 公立小学校 5年生・6年生 (5年生児童 22名、6年生児童 25名)
- ・場所 5年生教室、6年生教室
- ・実施日 2018年2月9日
- ・実施時間 2コマ×2クラス (1コマ 45分間)
- ・教科 総合的な学習の時間、社会科、道徳の時間
- ・キーワード 共生、世界に住む人々・社会・自然の様子
- ・目標 自分とは「異なる」または、「同じ」ということについて、
それぞれの感性、思考を使い、感じ考えることができる。
- ・授業方法 グループ活動を多く用いる。
- ・使用教材 小松義夫[1999]「地球生活記」福音館書店。小松義夫[2001]「地球人記」福音館書店。

「共生社会」の実現や、他国の文化や人権の尊重、自国への誇り等を培うことを目標とし、その目標を達成するための授業方法が模索されている(国際理解教育[2010])が、「理解」や「共生」の方法が先行しており、教材には、多様なアイデンティティーを持つ「他者」が存在しないと考えられる。例えば、「日本人である私」「在日朝鮮人であるクラスメイト」等のように、**それらの「存在」には、アイデンティティーが1つに固定されている現実がある。** どうして「違い」や「同じ」が私たちの前に現れるのか、何が違い、どこが同じなのかと、子どもたちの感性や思考に訴えかけていくことから始めたい。このことは、「違い」がすでに「違い」として教え込まれ、それが「ステレオタイプ化」し、そこから引き起こされる今日の国内外の社会情勢に異を唱えるものでもある。そこで、今回の国際理解教育実践においては、これらのことを意識し、

「現在の自己と他者という観点から世界を違いは違いとしてある」

と、提案する。

上記 「発表者授業案から抜粋」

○写真集を題材として、色んな世界にいる人達を認識させる。

同じと違いという観点から対話。



言葉にしてきたことを、視覚化できるように絵を描かせ、それを大きな一枚の作品とする。

5年生と6年生、それぞれ異なる世界(フォトコラージュのような世界)が出来上がる。

○児童：挙手←教師：指名ではなく、円になってコミュニティボールを使って「世界にある違い」発言（アイデアを出していく）する方法を援用する。

○授業実践を通して

Q：問いを出させる難しさについて

Ans：数を重ねることで子どもたちが「問い」をたてることに慣れていくということがある。
「問い」の前提を提示、挙手で「問い」を答えさせる。

※この後報告された小学校教員の「問い」に対する考察／実践も参考になると思われる。

Q：答えを「待つ」ことの難しさについて

e.gー同席していた校長先生が先に答えてしまうなど

Ans：他の参加者は全員納得：p4c的な教育実践に理解を示さない／示せない教員に多い対応であろう。

Q：セーフティーについて

子どもたちが「黒い 怖い 気持ち悪い」と言いかけたところ校長が方向性を変えた。／子どもたちも軌道修正した。

Ans：権威に拠ったセーフティーではなく内的に醸成されるセーフティーも、回数を重ねることで身についてくるのであろう。

他：以前インドネシアのパームオイルの授業では高評価をたが、今回の授業は違和感があったようだが。

Ans：公立小学校での実践なので、現状の公教育との接続が必要だろう。事前に学校側に概要を説明するなどし、ある程度の理解を得ておいたほうがよいのではないのでしょうか？

知識の注入に偏重しがちな現在の教育現場において、参加者が共通に抱えている問題点。

2. p4c works 2017

○中川さんによる報告：高校2年生による ポスター 作品集。本人による タイトルと解説つき。
感動を超えました。ーという中川さんの感想。

いくつかの作品と文章による解説を紹介。（※p4c japan の HP に昨年までのものが掲示されている。）
全てのクラスで提出されているのではないので、途中経過報告というかたち。

質問：クラスでのコンフリクトのメタファーや担任批判などの解釈ができるのであれば、ここでセーフティーが守られているのだろうか？

○意見：教師批判はどのような状況でも生まれる。教師自身に問題がある場合も多い。同僚批判をするのは論外だが、ポスターとその解説でそのような状況が生じたとしてもセーフティーが侵されたとは言えないのではないだろうか？

作品として作者（生徒）の了解のもとポスター／説明が公開されているのであるから、生徒個人はセーフティーに関する状況を受容しているのではないか？

3. 12, 1 月での報告でのカリキュラムマネジメントや中川さんにインスパイアされ国語で p4c をしてみよう／してみた（小学校）－国語授業における「問い」

○国語「海の命」（立松和平）を教材にしようと思っている。事前に「ごんぎつね」を題材におこなった結果を報告。

「『良い問い』を作るには？」（p4c についての再確認）を提示して、児童たちに「良い問いの基準とは？」（以下の 5 項目について問うたプリントを配布

- ①これまでの p4c の経験を振り返って、どんな時に良い議論になるでしょうか。自分なりの感想を書いて下さい。
- ②ごんぎつねを読んで問いを作ってください。
- ③黒板に書いてある問いをまとめて分類して下さい。
- ④どうやって、問いを分類しましたか？基準を書いて下さい。
- ⑤良い問いの基準と何でしょうか？自分の考えを書いてみて下さい。

○児童たちが記入したものを参考に

問いの分類－問いの 4 像元ⁱをイメージして。

子どもたちは話しやすい「問い」を選ぶ傾向にある。

話しやすい＝考えやすい／明るい問いがいい／対立する問い

問いのフォームにあてはまらないような問い。

物語の前提を壊すような問いは良くない。（何でごんは、人間の言葉を話すのか？のような）

教師を媒体としない問いが発現するようになればよい。

社会でもやってみよう。

○①～⑤を内面化することで哲学的な思考が身につく。

つまらないことを言っているようなときにその児童を評価（肯定的に）するのも大切。

4. プレカンファレンスについて

中川さん：川辺さん（アーダコーダ）と Skype で話し合った。基本線は以前に話した通り。

広報はアーダコーダさんに任せる。

※一記録者

ⁱ問いには、大きく分けて「確実にわかる問い」と「たくさんの答えの可能性が ある問い」という 2 つの問いがあり、前者はさらに、「調査すればわかる問い」（答えは本の中にある）と「専門家に尋ねる問い」（頼りになる情報源から答えを見つけることができる）の 2 つに、後者はさらに、「ブレインストーミングのような問い」（ふさわしい答えであれば、どんなものも答えになる）と「ディスカッションの問い」（議論するのに時間をかける必要がある）の 2 つに分類される。結局、問いは 4 つの象限になる。（フィリップ・キャム『子どもと倫理学』106 頁参照）